

婚約者に対する不満なら、付き合っていた頃から細かなチリのように積もっていった。掃除や料理といった家事をしないなら、まだいい。

朝から晩までフルタイムで働いている彼と、結婚するからと退職した私では、どうしてもそれらは私の役目になる。

問題は、彼が家に帰った途端、出張で使ったキャリーケースをそのまま放置しておくこと、脱いだ上着や靴下をそのまま床に放り投げること、食べ終わった食器を下げないこと、飲んだ酒の缶をテーブルに置きっぱなしにすること、テレビやリビングの電気をつけたままソファで眠ること、挙句、風邪をひいて私の仕事を増やすこと。

一つひとつは小さなことでも、挙げればこんなにキリがない。

「それで、本当に結婚するんですか？」

「夢がないな」と口元を歪ませながら、目の前の男は、小さなカップに入ったホットコーヒーをすすった。

到着してすぐのコーヒーは、銀色の細いフレームで縁取られたメガネのレンズをあつという間に曇らせた。

うつむき加減の長いまつ毛が、女が嫉妬するほどの束感をもってワイパーのように曇りを撫で消していく。

会うのは大学を卒業して以来だ。それなのに、微笑みを浮かべる薄い唇と、垂れ目がちで万人受けする柔らかい表情が得意な顔は、今も昔も変わらない。

「先輩が全部やっちゃうから、甘えるんだよね」

色艶の良い唇から漏れる「先輩」という単語を聞くのも、七年ぶりだった。

懐かしくて、昔を思い出して少し悲しくなって、だけどすぐに、会えた嬉しさが勝る。

「どうということ？」

七年の空白が無かったかのように、私も当時のように振る舞う。

「付き合いたてのときにさ、甲斐甲斐しく世話を焼いて、結婚が決まったら決まったで新

婚ごっこが楽しくてやってくれちゃうから、彼氏がやらなくなったんですよ」

「私のせいってこと？」

「いや、お互い様。彼氏にしてみたら、今までやってくれたのに何で文句ばかりって思うだろうし、先輩は先輩で」

「子供じゃないんだから、せめて自分のことは自分でしろよって思う」

「でしょ？」

まつ毛ワイパーで消えたレンズの曇りが小さな水滴に変わった。自然な動作でメガネを外して、白いTシャツの裾で拭いている。

私は、出されたミルクと砂糖を一杯入れたホットコーヒーに口をつけながら、Tシャツの隙間から覗く薄い皮膚の色を盗み見た。

この少年のような華奢な感じも、ずっと変わらない。筋トレをしてもあまり筋肉がつかないのだと言っていた。

私が三十歳を迎えても、彼はまだ二十八歳だ。たった二歳差ではあるけれど、男と女と

いうカテゴリーを付け加えるだけで、こんなにも焦りが違う。

プロポーズされたときは嬉しかったし、新居選びも楽しかった。夫になる人と一から作りをしながら、これから先、一緒にいるのだという安心感と覚悟のようなものが芽生えたはずなのに。

なのに、今はこんなに楽しくない。

二年付き合った婚約者は、最近になって残業だ、出張だと、しょっちゅう家を空けることが多くなった。そして私はそれに対して、疑いの気持ちを持ちながら何も言えないでいる。

先週は私が何も言っていないからか、はたまた婚約者も痕跡を消すことが面倒になったのか、自分のものではないピアスがスーツケースの中に転がっていたのだから、私のことはもうどうでもよくなっているのかもしれない。……もしくは彼の相手が意図的に仕込んだか。

まだ結婚生活がスタートしていないのに、今からこんなことではこれからの人生、先が

思いやられる。

どうするべきか頭では理解していて、あとは行動に移すだけなのに、退職するときに職場のみんなからもらった大きな花束を思い出しながら、現在進行形でお金も時間もかけて結婚式の準備をしている手前「やっぱりやめます」なんて、親にも友人にも元同僚にも、恥ずかしくて言えない。

例えばもし婚約者が、浮気相手と同じくらい、私ともっと会話してくれたら、触れ合えることができたなら、今きつとここにはいなかった。

七年ぶりに彼と会っているのも、出口の見えない悩みを誰かに聞いて欲しくて、連絡先に目がいって気まぐれにメッセージを送っただけだ。返事が来ることも会えることも期待していないかったのに。

「これ飲んだら、そろそろ行きますか」

彼の声にハッと我に返った。

メガネを外すとほとんど何も見えないと、昔聞いたことある。

裸眼になった彼は、少し目尻に皺を寄せていたずらっぽく微笑んだ。

数分前の彼と、百八十度変わった人相に、背筋がぞくりと寒くなる。

自分が間違ったことをしているのはわかっている。婚約者と同じことをしては、今後責めることも出来ない。

でも我慢できなかった。このまま結婚してこれから先、ぞんざいに扱われながら、夫の世話だけをしなきゃならない未来を見てしまうのは。女として見てくれなくなるのは。

だから今から、この人と七年ぶりにセックスをすることにした。女であることを思い出すために。あるいは婚約者を捨てて次に進むために。それには、彼以外に思いつかなかった。

「あー、なんかこの独特の匂い、久しぶりだ」

「懐かしい？」

「うん」

後ろめたさと後悔は、さっきのカフェに置いてきたかのように、私は久しぶりに訪れたラブホではしゃいだ。最後に来たのはいつだったか、もう覚えていない。

「先にシャワー浴びますか？」

背後から声をかけられて頷いた。ソファに座る彼を尻目に、バスローブやタオルを手早く準備して、理性が尻込みをする前に服を脱ぎ捨てる。

体を知らない仲じゃない。

大学の頃、彼の童貞を食ったのは私で、それ以降、私が大学を卒業するまで数えきれないほど何度もセックスをした。お互いの体のクセや好きなのところは、卒業する間にできた相手の恋人以上に詳しくなったほどだ。

あの頃の私は、彼のが好きだった。

だけど絶対に付き合えなかった。というか、付き合えなかった。

彼は入学当初から、どこか周りを一歩引いてみているような節があつて、何に対しても執着を見せず飄々としていた。初めは慣れない大学生活に緊張しているせいで勝手に想像して、先輩風を吹かせながら親身に話しかけてみたのだけど、そうじゃない。

サークルの飲み会で潰れた彼を介抱して、初めて寝た後、一線を引くかのように誰かと必要以上に仲良くするのが苦手なのだと言われた。

それを聞いてしまったら恋人になるのは無理なんだと、さすがの私でも理解する。彼の童貞を食って、それでもなお、「何かあつたらいつでも言いなよ」とか先輩面をしながら言つて、結局、振られるのが怖くて自分から彼の先輩兼セフレというポジションに収まったのだ。

当時の私はそれが最適解だと思つていて、その証拠に、何度セックスをしても、彼からは一度も私に対する好意的な言葉は聞かなかつたし、誕生日やクリスマスと一緒に過ごすようなこともなかつた。

体から始まって生々しい部分を知りすぎてしまったからだろうか。彼にとってそういう健全で和やかな行事は、まだよく知らない相手としたほうが都合が良かったのかもしれない。

入れ替わりでシャワーを浴びる彼をソファで待ちながら、ガラステーブルに放り出された彼の真つ黒なスマホ画面を見る。

カフェにいたときは自分の話ばかりして、彼の近況は聞かなかつた。聞いたところで今さら後には引けないけど、一体彼はどういう気持ちで、七年ぶりにセフレと会う気になったのだろう。

「なんでそんなところにいるの」

シャワーから出た彼が、おかしいものでも見たように笑った。

「ソファでしたいならいいけど」

「まさか」

伸びてきた手を取って、ベッドに移動する。ベッドでも私だけが座って彼は立ったままだ。舐めるような視線が降り注いでいるのがわかる。「先輩」と呼ばれて、ごこちない動きで真正面にいる彼に視線を合わせた。

「してみせてよ、オナニー。先輩のことだから、どうせ一人で慰めてるんでしょ」
「……なに言ってる」

唐突に、凶星を突かれてうまくかわせなかった。

もじもじと視線を泳がせる私に、痺れをきらしたのか「恥ずかしいの？」と尋ねてくる。

「……当たり前じゃん」と小さく抵抗した。

一人でしているところなんて、本来見るようなものじゃないし、そもそも私はセックスをしに来ている。自分の右手で事足りるなら、最初から呼び出したりしてない。

バスローブから伸びる自分の膝を見つめていたら、部屋がゆっくりと薄暗くなった。顔

を上げると同時に抱きすくめられて、ベッドの上に押し倒される。

どうせ脱ぐのだからと、バスローブは羽織っただけで前は緩く結んでいた。

久しぶりに感じる重さと体温に腕を伸ばす。

「ほら、手、貸して」

冗談かと思っていたのに、骨ばった手がバスローブの裾を潜り、私の右手の指を、足の間へ誘導する。

「……ここ、わかるでしょ？」

主導権を奪われた自分の中指が、皮を被ったままの突起をくにくにと押し潰した。

「や、あ……っっ」

「ちゃんと触って、手、止めないで。そうしたらいっぱい気持ち良くしてあげるから」

耳元で囁かれて、私は震えながらこくりと頷いた。彼は小さく笑った後、私の耳たぶに舌を這わせ、先っぽを固く尖らせて耳の中に挿じ込むように舐めた。

「ひぁ……っ」

鼓膜が、耳のふちや耳たぶを嚼る艶めかしい音を拾って、息を吐くたびに体がじわじわと熱を帯びる。

まだ恥ずかしかつたけれど、部屋が薄暗くなったのと、彼の顔が自分の真横にあるおかげで見られてることはないのだとわかって、誘導された指の腹でゆっくりと陰核を撫でた。ぴくん、と腰が勝手に浮いてしまう。

耳をほじくっていた舌が、今度はあごの輪郭を撫でるように首筋へ移動し、吸い付き、鎖骨を通って胸の膨らみまできた。

唾液を纏ってぬるついた舌は、テラテラとヘビが這った後のような痕跡を残し、そこに空気が当たればひんやりと冷たく、くすぐったいのか寒いのか、奇妙な感覚にふつつつと鳥肌を立てる。

私は言われた通りに指を動かした。初めは羞恥心で遠慮がちだった動きは、どんどん快感を貪るようにクニクニと肉芽を弄る。

「はあ……っ、は、……ん、んっ」

ちゅうつと胸の先端を吸われる。指先で摘まれたり、手のひら全体で揉みしだかれていると、お腹の奥がきゅうきゅうと収縮して、自分でもわかるくらいトロトロの蜜を吐き出している。

「は、…んっ、ああ…っ、んっ、んうっ」

右手の中指を動かしながら、無意識に両膝を広げて、空いている左手の人差し指と中指を膣内に潜り込ませようとした。

だけど彼は目ざとくそれを見つけて私の左手を捕らえると、顔の横に置いた。

「だーめ、中は指入れちゃダメ、一回こっちでイッて」

「…あッ、」

なだめすかすように言われ、ぎゅうつと陰核と摘まれる。ひくんつとナカが引きつれて腰が浮く。

「うん、ふ、く、うう、あっああっ」

乳首を舐められながら、ちゅこちゅことクリトリスを抜かれると、腰が揺れて声も抑え

られなくなる。入口から溢れ出た粘液は、掬ってもないのに彼の指先を濡らし滑らせた。

私は「オナニーをして見せる」という彼の言いつけを守れず、彼の指で腰をくねらせながら、胸にしゃぶりついている彼の頭を抱いた。

「い、っ、ちや……あッ」

目を瞑り、足の爪先までピンと突っ張らせて、顎が仰反る。

ぎゅっ、と膣内が締めまり、息を短く吐いた拍子にお腹の中がビクビクと痙攣した。

「は、……ふうっ、う、んう……、んあああッ」

休む間もなく彼の頭が足の間を潜り、一瞬前にイッたばかりのクリトリスを舐め上げられる。舌で包皮を剥かれてあらわになった部分は、生温かい舌でこね回されて、赤く腫れ上がったようにぷくりと膨らんでいく。

「うあッ、あ……んあ……っ、ねえっ、ソコばかり、舐めるの、やだ……あッ」

どれだけ訴えても、彼の舌は、れるおー……、と撫でるように舐めるのをやめなかった。彼の人差し指は、入り口に第一関節を入れたくらいで動かさずに止まっている。

「は、ううっ……いれて……ッ、おねが、いつ、あああ……っ」

私の言葉は無視されて、代わりにクリトリスをぢゅうっ、とキツク吸われる。子宮の奥がきゅきゅと、入っていないモノを締め付ける動きをしていてもどかしい。腰が跳ねた勢いで、指でもいいから深く埋まって欲しい、掻き回して欲しい。

「んうー……っ、ふっ、うう……っ、ああッ、待、…っ、」

さっきまでのねっとりとした舌の動きが変わり、今度は薄い唇でクリトリスをむにむにと挟まれる。むず痒いような刺激に腰が振れて、知らずに彼の顔に押し付けてしまう。彼は閉じようとする内腿を広げて顔を沈めて、唇で挟んだクリトリスを舌尖でピチピチと弾いた。

「イっ、~~~~~」

目の前を、白い線香花火のような細かい光が散った。

自分の体が、意思と関係なくビクビクと跳ねる。唯一、手だけは力を入れることができただけ、それも、キャパを超えた快楽をどうにかしようとしてシートを握るために使われて、

彼の舌を止めることができない。わざとらしく音を立てて吸いつかれて、腰をへこへこと揺らしてしまつ。

「……はッ、はあ、……は、あ、んう……っ」

ようやく舌が離れて、絶頂の波に飲み込まれて荒くなった呼吸を整えていると、ぶるりと自分の意思に反して体が大きく震えた。

第一関節しか入っていないかった指はちゅぷつと粘ついた水音をたてて抜かれ、その拍子に、こぶ、と痙攣したナカから白濁した本気汁が溢れてくる。

彼はさらに私の入り口を両手でこじ開けてきた。お腹が上下するたびに吐き出される濁った蜜が、さらによく見えるように広げられて、羞恥で顔が熱くなる。

「……あー……はは、……すごい充血してる。これ、指突っ込んでクリトリスの裏側擦ったらまたすぐイッちゃうねえ」

その言葉に背中がぞくりとした。してくれるのだろうか……。して欲しいなんて言えば、またどうせこちらが恥ずかしくなる言葉ばかり降ってくるから、私は次の行動を待つ

し
か
な
か
っ
た
。